

中国の方言グッズにおける方言の表記法とその特徴

日高知恵実（金沢大学）

1. はじめに

井上（2000）は日本の近代以降における方言の社会的位置づけの変遷について「方言撲滅」「方言記述」「方言娯楽」の三類型を立て、このうちの第三類型では共通語化が最終段階に達したことでかえって方言に特別な価値が見出され、娯楽の対象や経済効果に結びついたと分析している。

中国でも「在来の土地のことば」としての方言は衰退しつつあるが、一方で、方言を生活語以外で積極的に受容・活用する新たな動きが起きており、日本と同様、方言に経済的価値を見出し活用した「方言グッズ」が存在する。本発表では、発表者が収集した中国の方言グッズのうち、「方言トランプ」と「方言絵はがき」を題材として、そこに見られる方言の表記法とその特徴を明らかにする。

2021年1月10日時点では、方言トランプ32種類（天津2、河北3、河南7、山東4、江蘇2、湖北1、湖南1、山西1、陝西1、甘肅2、四川5、重慶3）、方言絵はがき3種類（山東1、陝西2）の現物を確認した。地域ごとの内訳を見ると、北方方言の分布地域に集中しており、中でも四川・重慶や河南が目立つ。

2. 方言グッズにおける方言表記の基本

世間一般に流通している方言グッズでは、専門性や正確さが求められる学界とは異なり、自由度の高い表記がなされている。方言表記は基本的に標準語の発音で同音・類似音となる漢字が用いられる。方言グッズの漢字表記を専門家の方言記述と照らし合わせると、一致するものもあれば、一致しないものもある。一致しないものについては、単に製作者が「本字」「正字」、すなわち文献調査や歴史音韻論的考証がなされた「正しい表記」を知らないという側面もあるが、意図的に別の字を持ち出している背景もある。というのも、北方方言には音声的なバリエーションはあっても、漢字で表記すると標準語形と同一になる語が多いため、差別化が図れない。そのため、わざと「正しく表記しない工夫」がなされているのである。

漢字での表記に加え、「ピンイン」（中国式ローマ字）と「声調符号」（四つの声調を示す符号、高平調・上昇調・下降上昇調・下降調）によって音声を示されているものもある。しかし、これらの記号はあくまで標準中国語「普通話」の音韻体系を示すために制定されたものであって、標準語と異なる音声や体系を有する方言を表記するには不十分である。そのため、限られた記号で方言を表記する工夫がなされている。

また方言トランプでは、語義の説明や語形を含めた例文を提示するものも少なくない。

3. 方言グッズにおける方言表記の特徴

3. 1 ネット流行語の影響

ではまず、実際の例を見ていきたい。西安方言トランプでは、一人称「私」を意味する“我”が“額”と表記されている（図1）。“我”は標準語で[uo]と発音されるが、西安方言では[ŋx]と発音される。この発音が「頭のひたい」を意味する“額”の標準語音[x]と似ているのである。

蘭州方言トランプでは、疑問詞“誰”が“肥”と表記されている（図2）。蘭州方言が属す漢語方言区画「中原官話」では、そり舌音>唇齒音という歴史的変化が部分的に起きているため，“誰”[ʃei]は[fei]と発音され、標準語の“肥”と同音になる。“肥”は「太っている」という意味であることから、語義的なギャップによって笑いが生じる。

天津方言トランプでは、「さわる・なでる」を意味する“摸”が“猫”と表記されている（図3）。“摸”は標準語では[mo]だが、天津方言では[mao]と発音され、「猫」の標準語音[mao]と同音となるためである。

以上で見たような、「正しい表記」をせず別字を当てる手法は、方言由来のネット流行語における表記から発想を得たものと考えられる。中国が正式にインターネットに加入したのは1994年4月20日とされ（自治体国際化協会, 2013）、その後インターネットが一般に普及すると、様々なネット流行語が生まれた。その際に一つのパターンとなったのが、各地の方言音の類似性を利用した言葉遊び（homophony）や方言語彙の取り込みである。方言由来のネット流行語に関する先行研究は、曾海華(2009)を皮切りとして2010年代初めに複数の報告がある。侯超(2013)は「携帯電話などのピンイン入力による打ち間違いの面白さが新しさを求める若者たちの間で流行した」と指摘している。さらに黄広芳・梁璐茜(2017)では、方言のこういった言語特徴がネット用語に取り込まれているのかについて、①声母（音節頭子音）、②韻母（母音または母音+音節末尾子音）、③声調、④合音、⑤語彙借用といった五つの方面から詳しく分析している。

二音節が合わさって一音節で発音される「合音」の事例としては、例えば以下のものがある。洛陽方言トランプでは「何をする?」という疑問フレーズ“做啥”が“抓”と表記されている（図4）。“做啥”は洛陽方言で[tsu ʃa]と発音されるが（賀巍 1996）、[tsu ʃa]>[tsua]という変化が起きたことで、「捕まえる」という意味の動詞“抓”の標準語音[tʃua]と類似音になり、この字が当てられている。

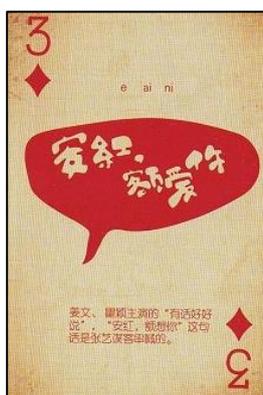


図1 西安方言トランプ 図2 蘭州方言トランプ 図3 天津方言トランプ 図4 洛陽方言トランプ

3. 2 限られた記号で表記する工夫

上述したように、方言グッズではピンインや声調符号といった既存の限られた記号を使って方言音を表記する工夫がなされている。

例えば、図1の西安方言トランプでは、“額”（本来は“我”）の音声[e]と記されている。伝統的な西安方言では軟口蓋鼻音[n̠]を伴って[n̠x]と発音されるが、標準語では音節頭子音としての軟口蓋鼻音は存在しないため、この音声的特徴はいわば「無視」されている。もしくは、標準語の影響により、若年層の話す西安方言では音節頭子音としての軟口蓋鼻音が消えていることから（孫立新, 2010）、若年層の発音を反映したものと解釈することもできる。一方で、同じく軟口蓋鼻音を音節頭子音として持つ成都方言のトランプ

プでは、「間近」を意味する“挨辺”の音声 ngai bian と表記されている。これは、標準語で音節末尾に現れる軟口蓋鼻音[ŋ]のピンイン表記 ng を応用した例と言える。

ピンインを応用した例は他にも見つかる。例えば、標準語では母音 [o] と結合する音節頭子音が唇音 [p, pʰ, m, f] と側面音 [l] に限られているため、それら以外については対応するピンイン表記が存在しない。しかし、成都方言には歯音や舌根音と母音 [o] から成る音節も存在する。そのため、co, go, ko, ho といった表記を新たに創造することで、成都方言の音声的特徴を示している。

では、声調はどのように表記しているのだろうか。中国の北部および西南部に分布する北方方言は、山西省や長江流域の入声を有する方言を除き、大半が四声調体系または三声調体系である（曹志耘, 2008）。例えば、武漢方言は中古音の枠組みと照らし合わせた際の声調対応規則こそ標準語（北京方言）と異なるものの、いずれも四声調体系であり、上昇や下降といった声調の型もほぼ同じである（表 1）。そのため、声調符号を転用することで武漢方言の抑揚を上手く再現している。

一方、洛陽方言も四声調体系であるが、洛陽方言トランプでは三種類の声調符号しか使われていなかった。分析の結果、陽平字と去声字を一つにまとめて標準語の第四声の符号で示していたことから、製作者が両者を同一もしくは類似の下降調であると認識したことが明らかとなった。上声も下降調であるが、標準語の第一声の符号（高平調）が当てられていた。ここには、製作者の直感的な言語観が反映されている。

表 1 標準語（北京方言）・武漢方言・洛陽方言の声調体系とその調値

	陰平（第1声）	陽平（第2声）	上声（第3声）	去声（第4声）
標準語	55（高平調）	35（上昇調）	213（下降上昇調）	51（下降調）
武漢方言	55（高平調）	213（下降上昇調）	42（下降調）	35（上昇調）
洛陽方言	33（中平調）	31（下降調）	53（下降調）	412（下降上昇調）

3. 3 新たな漢字の創造

すでに述べた通り、漢字での表記は標準語の発音で同音・類似音となるものを用いるのが基本とされている。そうした中で、製作者自身が考案したと思われる漢字も見受けられた。

西安方言絵はがきでは、疑問詞「何」を意味する[sa]が“嚙”と表記されている（図 5）。“嚙”は康熙字典に該当があるものの、古代中国西部の遊牧民族を指す固有名詞と説明され、日常的に目にする漢字ではない。これは常用字の“薩”[sa]（「ピザ」「比薩」「地名のラサ」「拉薩」）に口篇を加えることで、方言表記であることを強調しているのである。“[口企]”についても同様の造字法が適用されている（図 5）。西安方言では「行く」を意味する“去”が[teʰi]と発音され、標準語音の[teʰy]と比べると円唇を伴わない点で音声的な特徴がある。この点を強調するため、[teʰi]という音を表す“企”に口篇を加えて“[口企]”という字を創造しているのである。

では、口篇を加えるという発想はどこから来たのだろうか。張栄栄(2020)によると、粵語には口篇を伴う漢字が多く存在し、18世紀以降の粵語文献、すなわち戯曲作品、歴史史料、宣教師による音訳表記まで遡る。これは借音表記をする際に元の漢字と区別するための工夫である。中国では1980年代に改革開放政策が始まると、香港や台湾のポップスが大量して流れ込んだ

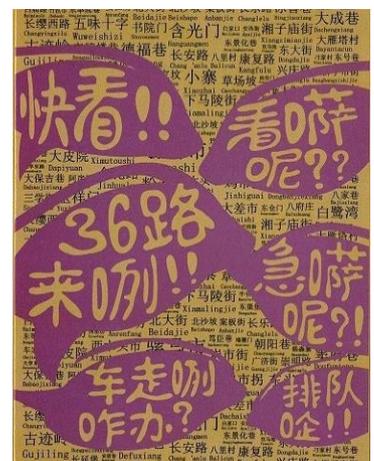


図 5 西安方言絵はがき

(千田・山下, 2008). この点を踏まえると, 香港ポップスの歌詞などに並ぶ粵語由来の漢字から, 口篇を加えることで方言音を記す方法を知り, しかもそうした認識はすでにある程度広まっている可能性がある.

4. おわりに ーなぜ中国の方言グッズに地域的な偏りがあるのかー

方言グッズが生産されて市場に出回るようになった背景としては, まず標準語の普及や識字率の向上が挙げられる. 方言語彙や方言音を表記するには漢字・ピンイン・声調符号などの知識が不可欠であるし, 購入者側にもそうした知識があることを前提に商品化がおこなわれているからである.

さいごに, 方言グッズに地域的な偏りが生まれた理由について, 言語的要因と社会的要因の両面から考えたい. まず言語的要因としては, 北方方言と南方方言の質的な差異が関係している. Ramsey (1987, 高田時雄ほか訳 1990)が指摘するように, 北方方言(官話)は均質性があり互いに意思疎通が可能であるが, 南方方言には大量の変種が存在し, その方言に精通していなければ聞いても理解できない. 方言の違いを「面白い」と感じたり, 聞き間違いが起きるのは, 対象となる方言をある程度理解できることが前提となる. この点を踏まえると, 方言グッズが標準語と同一系統に属する北方方言のものに偏るのも納得できる.

社会的要因としては, 2000年代以降に急増した農村から都市への流動人口が一つの可能性として挙げられる. 中国における流動人口の主な供給源は内陸部で, 特に四川は出稼ぎ労働者の流出総数が最多である(嚴善平, 2009). そしてこれらの地域は, まさに方言グッズが盛んな地域でもある. 出稼ぎ労働者の話す方言が都市住民にとって「よく耳にする」存在となり, さらに出稼ぎ労働者へ向けられる差別的な視線が合い重なることで, ある種の自虐的な方言グッズが「ウケる」風潮が現れたのではないだろうか.

中国の方言グッズの表記には, 方言の新たな受容状況だけでなく, 現代社会の縮図が映し出されている.

謝辞

本研究は, 科研費 JP 20K13002 (若手研究「中国における官話方言の新たな受容・活用の実態解明に向けた包括的研究」)の助成を受けたものです. 方言グッズの収集にあたっては, 自身が現地で購入したほか, 中国在住の友人である蘇倫さん, 王丹さんに多大なご協力をいただきました. 心より御礼申し上げます.

参考文献

- 千田大介・山下一夫(2008). 北京なるほど文化読本 大修館書店.
張栄栄(2020). 粵方言“口”旁自造字的性質及相關問題 五邑大学学报社会科学版, 11(02), pp.78-82.
賀巍(1996). 洛陽方言詞典 江蘇教育出版社.
嚴善平(2009). 農村から都市へー1億3000万人の農民大移動(叢書 中国的問題群 7) 岩波書店.
井上史雄(2000). 日本語の値段 大修館書店.
自治体国際化協会(2013). 中国におけるインターネット発展と自治体情報発信の展望 Clair Report, 383
侯超(2013). 方言与網絡語言 語文建設, 4, pp.64-66
黄広芳・梁璐茜(2017). 地域方言对諧音網絡流行語形成的影響 湖北工業大学学报, 32(06), pp.104-108.
孫立新(2010). 西安方言語音的内部差異 甘肅高師学报, 15(01), pp.67-71.
曾海萃(2009). 網絡語言与方言 魅力中国, 22, pp.139-140.
曹志耘(2008). 漢語方言地圖集・語音卷 商務印書館.
S. Robert Ramsey (1987). *The Languages of China*, Princeton University Press. (S.R.ラムゼイ著, 高田時雄・阿辻哲次・赤松祐子・小門典夫訳(1990). 中国の諸言語ー歴史と現況ー 大修館書店)